

48

## ベルツ博士の遺言 「第一回聯合医師会での提言」

山上 勝久

山上医院

ベルツ博士は、明治政府の「お雇い外国人」の一人として1876年（明治9年）来日し29年間滞日した。その間、東京医学校（後の東京大学医学部）での教育、診療、研究をする傍ら、日本各地を訪問し、多くの業績を残した。日本の「近代医学の父」と呼ばれているが、その業績は単に医学分野のみでなく政治、文化の幅広い分野に渡っている。1905年、日本での任務を終え日本人妻、花子（荒井花）とともに帰独した。それに先立つ1902年、ベルツ博士は第1回聯合医学会（現在の日本医学総会）に名誉会頭（会頭、田口和良）に推され講演した際、一種の「遺言」として日本医学界と医師に貴重な提言を行っている。会場は東京最大の講堂を有する音楽学校で開催され、満員の盛況を呈した。開会は小松宮殿下（天皇陛下の御従弟君）により宣せられ、続いて首相、文相等の講演が行われ、ベルツ博士は長時間に亘る講演を行った。最後に石黒男爵の閉会の辞で、此の会は無事終了した。その冒頭で、ベルツ博士は「諸君！私が本医学大会に於て、講演を行いますのは、之が最初であり、又最後であります。最後と申しますのは、私の日本医学上の契約は遠からずして、満了するからであります。云はば本講演は私の遺言とも云へませう。」と述べている。その提言には、多数の苦言もあり、すでに110余年も前のものであるにもかかわらず現在でも傾聴に値するべき内容が含まれている。

- 1) 学会の分科については、当時13分科会があったが、「本学会が、余りに小分科に区分される事は、大いに警戒の要があります」と細分科されることを警告した。
- 2) 専門家（ここでは薬の専門家として限定して述べている）に対する苦言として当時問題になっていた結核に対する治療としてのツベルクリン療法についての根拠に乏しい治療をあたかも秘伝のように実施している医師がいることに反省をうながした。
- 3) 家庭医（Familienarzte）の任務について治療として薬物治療のみに注意を払うだけではなく、既に「予防」（Präventivmedizin）という言葉を用い、抵抗力を高める身体を作る指導や理学療法も行わなければならない、と提言し、「普通医師は、患者のみ診断してあるものであって、健康体の研究は怠ってあるものでありますから、果たして健康体の鍛錬についての心得を有してあるか大いに疑問に思ひます。茲に各国に於ける医学教育の短所があるのです。即ち健康体に付いての教授を以て医学習業の第一歩としないといふ欠点があるのです。医師は、生きてある人間を取扱ふのであつて、死んだ人間を研究するのではない事を銘記しなければなりません」と講演した。また、「医学教育の体系に付いて一言しますならば、かねがね私が希望して居ります様に、日本に於ては、理論的方面は第二段として先づ最初に實際的な臨床方面の研究が行はれる必要があります。此の見解については、私は充分な根拠を有して居ります」と理論研究偏重についても言及している。
- 4) 医学は科学と同時に一種の芸術「患者が医師を選ぶのは、其の医師が多く勉強してあるとか、博学であるかによるものではなく、彼の有する医学的知識を適宜に、患者の治療に応用する処の才智の有無に懸るのであります。此の応用こそ一種の芸術であります。」と医師の目指すべき像を提言した。
- 5) 帝国大学の医学教育と日本医学の歴史にも論及している。

（講演内容の部分は、「碩学ベルツ博士」から引用）